

斎藤 栄

水の魔法陣

上



集英社文庫

みず まほうじん
水の魔法陣(上)

1983年4月25日 第1刷

定価はカバーに表示
してあります。

1988年1月25日 第15刷

著 者 さい とう さかえ
 斎 藤 栄

発行者 堀 内 末 男

発行所 株式 集 英 社
 会社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101

(230) 6100 (編集)

電話 東京 (230) 6171 (販売)

(230) 6080 (製作)

印 刷 大日本印刷株式会社

本書の内容の一部または全部を無断複写、複製、転載することを禁じます。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

集英社文庫

水の魔法陣
(上)

斎藤 栄



集英社版

目次

第一章	受水槽の死	六
第二章	謎の投稿者	三九
第三章	人工腎の娘	七六
第四章	恐怖の誘拐	一五
第五章	滅菌用塩素	一三三
第六章	容疑者たち	一八
第七章	犯人の消失	二三九
第八章	ハイツの女	二六六
第九章	新幹線駅頭	二九七

第十章	真夏の追跡	三二八
第十一章	不幸な目撃	三四二
第十二章	銀行強盗団	三八〇
第十三章	印肉の指紋	三九三
第十四章	錯乱の万引	四二二
第十五章	大事故発生	四三四
第十六章	遺体の秘密	四七七
第十七章	荒廃した寺	五〇六
第十八章	弁天の化身	五三七
第十九章	生と死の間	五六四
第二十章	古代の神話	六〇四

水の魔法陣
(上)

第一章 受水槽の死

横浜市港南区にある野沢建設の分譲マンション・ひばりガ丘ハイツは、緑に囲まれた小高い丘陵部にあつて見晴らしがよかった。

五年前の分譲直後には、二階以上の窓からは、西方に富士山を望めたほどで、それがこのマンションのセールスポイントだったくらいなのだ。

今では、水谷章子の住む705号からは新興住宅の屋根が邪魔をして、富士山どころか、見えるのは物干場にひるがえるおむつという始末になり果てた。

それでも章子は、ダイニングキッチンの小窓の下方に、かなり大きな木斛もくかくの樹があつて、そこへ時折、目白やキジバトが飛んでくるのを見る楽しみを持っていた。

昨夜、夫は会社の慰安旅行で熱海あたまへ出かけ、章子は一人で寝た。こんなときでないと、ゆっくりと朝寝坊もできないと思ひ、今朝は午前八時半まで床の中にいた。

起きて、まず顔を洗う。

水道の蛇口をひねり、コップ一杯の水を汲むと、それから自分の鼻先へ持つてくる。

プーンと嫌な臭いがする。今朝は特に強いようだ。このところ、こうした動作が章子の日課になつてしまった。水道の水に臭気があるのだ。カルキと呼ばれる塩素のそれではない。

章子は、幼い頃から、妙に嗅覚が鋭いところがあった。母親が炊事中、風のために細く点けたガスの火が消えたのに気がつかなかったのに、章子は隣室にいてガス臭を感じた。お陰で、惨事にならずにすんだ。似たような話はいくらかもあった。

章子は自分の鼻に自信を持つようになった。そのために、どんな料理を前にしても、必ず、まず匂いを嗅ぐ習慣ができてしまい、結婚直後は、よく夫に笑われたものである。

彼女が水道の水の異臭に気がついたのは、三日前からだった。煮沸すればそれほどではないが、生水を飲むうとすると、ツーンとした刺激臭があり、胸がムカツとする。

「あなた。この水、変じゃない？」

夫に訊いたが、鼻はあまりよくないらしく首を横に振るばかりだった。

「これは水道の水だぜ。水道局がちゃんと殺菌してくれているんだ。心配していたらキリがない。まして、横浜の水は、日本一うまいという評判なんだから……」

夫に言われてしまうと、〈そうかな？〉と思い、強くは主張できなかった。

しかし、今朝は格別にひどい気がした。

このマンションは八階建である。高級分譲マンションの触込みだったし、分譲価格も高かったもので、一般のサラリーマンは少なく、大会社の部長や自由業の者が大半を占めていた。まれには年輩の看護婦や学生さえ、いることはいだがそれぞれ特殊の事情があるらしい。とにかく、こうした住人は、日曜日の午前は、ほとんどベッドにいたので、水の使用量は少ないのだ。

〈本当におかしいわ……〉

章子は蛇口をあけ放しにして、しばらく水を流れるままにしておいた。そして、時折、鼻を近

づけて匂いを嗅いだが、普通、こうすると弱まるはずの嫌な臭いは相変らずだった。

水道鉛管が腐蝕しているにしては、生々しい臭気である。

上水道の中に異物が混入することがあるのだろうか。章子には、そうした真夏に向かう時季に、臭気に悩まされつづけるのは、憂鬱だと思った。

「こんなときはどこへ相談したらいいのかしら？……やはり水道局に頼むのかしら？……」
考え込んだが、名案も浮かばず、仕方なしに蛇口を閉じようとしたとき、一瞬、水の出が自然に細くなつた感じであつた。

「あ」

内心で呟いた。何か細くて黒いものが、水の流れに押し出されて、ながしの上に伸びた。

章子はビクツとした。

水道の中から、それがなんであれ、異物がとび出したのは、初めての経験だった。

章子は自分の瞳を疑った。

普通の家庭では、水道管の修理工事などがあると、必ず、しばらくは水道の水が濁る。しかし、高層マンションでは、受水槽の水がポンプで、高置水槽にあがり、そこから給水されるために、水の濁りはない。

つまり、汚泥などがはいっても、水槽の底に沈んでしまうからだ。

それなのに、今、章子の目の前に、ふた筋み筋、ハッキリと異物が現われている。

「これは……髪の毛だわ……」

理由もなく、章子はゾツとした。

これまで、こんな莫迦な話を聞いたことはなかった。生まれて初めての経験である。水道の蛇口から、髪の毛が流れ出るなんて……。

章子は、念のために、ながしのステンレスにへばりついた一本の髪の毛を指先で、そっと拾いあげた。

〈違うわ。やっぱり私のじゃない……〉

一目で分かった。

章子の髪の毛は剛毛というのにふさわしい。

「こんなに硬いと、早くから白髪になるわよ」

高校時代、友人に揶揄われたくらいのも硬さがある。それなのに、今、蛇口から出て来た数本の長い毛は、実に柔らかくて細い。そのまま、まるで生きているように彼女の指にからまりついた。

〈薄気味悪い……〉

章子は指先を震わせ、毛を落した。そして、いったん閉じたカランを再び開いてみた。

スーッと更に数本の毛が流れ出てくる。もう異状はハッキリした。

要するに、水道の中に、何かが混入しているのだ。どの場所かは分からない。しかし、髪の毛……それも人間のものだとすると、一体、どういうことになるのだろう。

〈まさか……〉

と、章子は自分の頭に閃めいた、ある恐ろしい想像を、すぐに振り落した。

けれども、この異様な臭気はどうしたことだろう。

〈お隣はどうなのかしら？……訊いてみましょう……〉

長く住んでいても、マンション内の住人同士は、お互いにそれほど交際はない。隣の住人だけは、盆暮の贈り物などを受け取ってもらったり、こちらも預かったりで、自然に親しくなっている。

章子は簡単に化粧を直すと、廊下へ出た。

チャイムを鳴らすと、まだ眠そうな声が返ってきた。

佐原雄次という、この主人は大手商社の営業部長だというが、章子は滅多に顔を見た記憶がない。

「……奥さま……妙なことをお伺いいたしますけど、お宅、水道のお水、変な臭いがいたしますせん？」

章子は少し、上ずったような声で訊いた。

「……お水ですか？……さあ……どうでしょうか……」

気のない返事が戻ってきた。そして、ドアが開いた。

佐原夫人は、ネグリジェの上に、薄いピンクのガウンを羽織っていた。

「あら、お休みでしたの？　ごめんなさい」

章子は言った。

「いいえ、構いませんのよ、今日、宅は留守ですし……でも、一体、どうなさったの？」

「奥さま……変なんですのよ。水道の蛇口から……人の髪の毛が出てまいりましたの」

「え……」

「嘘じゃありませんわ。それにひどい臭いがするし……。ちょっとお宅のを拝見させていただけ

ます？」

「どうぞどうぞ……」

佐原夫人に案内され、章子は自宅と同じようなつくりのキッチンのながしの前に立った。

蛇口をひねった。

カランから迸り出た水に、章子は鼻を近づけた。

「臭いますわね」

「本当？」

佐原夫人がそばへ寄って来た瞬間、丁度、ソーメン流しのように黒い髪の毛が蛇口から吐き出された。

「……………」

章子が悲鳴をあげ、佐原夫人も呆然と立ち尽した。

もはや議論の余地はなかった。水道管の中に、思いもよらない変化が起きているのだ。

「武藤さんにお話ししてまいりますわ」

章子はそう言って、佐原夫人と別れ、武藤孝の住む一階の101号室に、エレベーターでおりた。

ひばりガ丘ハイツは、分譲マンションのために、建設業者による管理人はおかれていない。そのかわり、全四十世帯が選挙で選んだ自治会長が、建物の維持管理なども含めて運営しているのである。

武藤孝は、元興産銀行人事部長だった人物なので、入居者の信頼も高く、この種のポストには最適だと噂されていた。

章子のお話を聞き終ると、武藤は白髪を左右に振るようにして、信じられない顔をした。

「……蛇口から髪の毛など……とんでもない。わたしのところの水道では、そんなことはありません。現に今朝も使いましたが……」

「このマンションの水は、一応、屋上へ汲みあげるんじゃないやありませんの？」

章子は訊いた。

「そうですよ」

「だったら、水質が汚れていた場合は、屋上に近い方から、異変が起きるのが普通ですわ」

「なるほど」

「このマンションでは、受水槽というのは、どこにあるんですか？」

中高層のビルでは、水圧が不足するために、高い階層の部屋に水を送るには、一度、水道局から来た水を、地下などにつくった受水槽のため、次にポンプアップする。これが日本での現在のやり方なのだ。

欧米では、この受水槽には問題があるとして、直接、本管から各家庭へ配管している。

受水槽は、したがって、水道局とは無関係のビルの施設なのである。そのために、水質基準でいわれる殺菌のための残留塩素のPPMなどは、受水槽にはいるまでが問題とされ、それ以降は、水についての素人であるビル管理者に委せられているのが現状だった。

「ここは、地下の駐車場の下ですよ」

「行って調べていただけませんか？」

「そうしますかな」

武藤は気乗りしない様子だったが、血相をかえた章子の勢いに、やっと重い腰をあげてくれた。ひばりガ丘ハイツは、建物の周囲に約三十台分の駐車場を持つが、それでは全世帯に足りない。今日は日曜日なので、二、三の空きを除いて、車は割り当てられた位置に駐まっていた。

「あれが受水槽の掃除口ですよ」

武藤が教えてくれたのは、一隅に忘れられたような黒い姿を見せた一箇の鉄製マンホールである。

「これまで、掃除したことは？」

章子が訊いた。

「未だ、ないでしょう」

「車のそばじゃ、オイルが流れ込む心配がありませんの？」

「そう簡単にはいるわけではないでしょう」

しかし、武藤の証言にもかかわらず、章子の不安は広がっていった。というのは、一見、重そうなマンホールの蓋も、武藤が持ち出した鉄棒と、高さ十数センチの鉄の支点を使って、案外、やすやすとずらせることができたからである。

章子は、蓋が開いた途端、路面のガソリンを浮かせた水が、ポタポタと内部へ落ちるのを、驚いて見詰めた。

「私達の飲んでいる水は、こんな汚いものだったんだわ……」

武藤は、夜間の非常用ライトを構え、丸く開いた暗い穴の中を照らした。章子も覗いた。

なんとという恐ろしい光景だろうか。足許に、こんな深い水のタンクがつくられていたのだ。

章子は生まれて初めて、受水槽というものを見た。それは暗く深い水であった。しかも、絶えず流れつづけている生きた水だった。

受水槽の受け口には、自動の水量調節器があつて、常に一定の水深を保てるようになっていた。あ、あれは……」

覗いていた章子は、その水面近くを半ば以上沈みながら浮遊している一箇の黒い物体を発見した。

「お……」

同時に武藤も呻いた。

彼は自分の瞳が信じられないように、反射的に右手で目をこすった。

受水槽の内部で、水面から突き出ているのは、明らかに人間の手であった。しかも、それは死後なん日も経ったらしく、ふやけ、肉がおちている腐乱死体なのだった。

「……………」

そのものの実体が分かると同時に、章子は、声にならぬ声をあげて顔をそむけ、その場に激しく嘔吐してしまった。

なんとということか……。この高級マンションの住人は、長いこと死体の溶け込んでいた水を飲み続けていたのだ。

先刻、章子と佐原夫人が確認した髪の毛は、ポンプで汲みあげられ、屋上の高置水槽から配水

されたこの死体の髪の毛だったに違いない。

「これは大変だ！」

武藤は跳ねあがった。いかに慌てていたかは、無意識にマンホールの鉄蓋を閉めようとしたことでも分かった。それから嘔吐している章子を放り出したまま、一階の自分の部屋に駆けあがった。

110番をかけに行ったのである。

そうした気配を、嘔吐しながら、章子はじつと聞いていた。このマンションの水道の配管が、こんな風になっているのを、今、初めて知ったのである。

蛇口から出る水は、“お役所”が配ってくれる清潔なものとはかり信じていた自分が、莫迦に思えた。

「こんな水を飲まされていたなんて……」

夢ならば醒めて欲しいとまで思った。

怖かった。

武藤はなかなか戻って来なかった。怖いもの見たさの心理で、章子は放り出されていたライトを、再び、水面へ投げかけてみた。

顔は水面下に沈み切っていた。人相は不明である。しかし、脱けた髪の毛が、水面に一面の縞模様をつくっている。腰の部分が上を向いて、少しずつ流れ動いていた。

「女だわ」

と章子は感じた。